

なるほど 2

(第二編 新旧分合)

照
伝光

前書	1
第二十章 リングラング	3
第二十一章 ピンハネ特殊法人	17
第二十二章 公約と詐欺	29
第二十三章 合体	41
第二十四章 海水消滅	65
第二十五章 サブマリン八〇八	81
第二十六章 分離	101
第二十七章 公務員とボランティア	107
第二十八章 キャリア	127
第二十九章 ステイープ・ゲイツ	143
第三十章 領土拡大	155
第三十一章 新しい指導者	165
第三十二章 グレーデッドの真意	179
第三十三章 分割	195
第三十四章 ミラーアリカメラ	219

前書

前書

現在（2020年）新型コロナウイルス感染症拡大で世界的な混乱が起こっていますが、この物語ではメキシコ湾に穴が開いて海水が吸い込まれ海面が急下降する一方、内陸部の砂漠に海水が溢れるという大パニックを例の不思議なテレビを通じて世界がどのように動いたのかを仮想しています。このパニックの原因は拙著「トリプル・テン」シリーズの主題でもあります。興味のある方は是非「トリプル・テンI」をお読みください。

さて「決断とその日暮らし」とか「ケセラセラ」とか「何とかなるさ」などと言いますが、思ったほど物事はうまく行きません。だから時間の流れのなかで生かされているという運命を受け入れざるを得ません。

しかし、本当にそうでしょうか。

ほんの数秒前、あるいは数分前にしたことならやり直せるのではないか。それができないとなると人生に機微があるというのは説明できないのでは？ 目の前の事実から、それがピンチならなおのこと、次々と手を打ちやり直す。そうすることによってこそ初めて未来が見えてくるのではないのでしょうか。

不思議なテレビやその映像の秘密を通じて平凡な人生を歩む田中という男がこのように考え

前書

始めて、やがて身の回りに起こる事件について、単純に「なるほど」と受け入れられるのか、何らかの対処をして受け入れようとするのか、を面白おかしく描いてみました。

つまり、よくある事件の一方、起こり得ないと思われるような事件を題材に、少しずつ観点をずらして並行的に進行するように展開させて時折コラムのような世間話的な話題を息抜きとして挿入しました。

ますます物語は混迷さを増していい加減な方向に進んでいきます。

第二十章
リングラング

「金持ちになると品が悪くなるのね」

「わしはならんと思つていたが。もうひとりの自分を見てがっかりした」

「取りあえず、この高級車を何とかしなければ。このままだとまた駐車違反になってしまう」

田中がドアを開けて運転席に座る。

「すごい！」

「運転の仕方は安物でも高級車でも同じでしょ」

山本が助手席に、大家が後部座席に落ち着く。

「確かにすごいクルマだ。こんなクルマで町内を回って家賃の集金をしていたのか」

「どこへ行きます？」

「周りの状況がこんなに変わつては、元地主といえども今いる場所がよく分からん」

田中がゆっくりと車を発進させる。しばらく走ると「大家駐車場」という看板が目に入る。敷地に入るとすぐに「大家」というプレートが貼つてある車止めを見つける。田中は慎重にバックして駐車を終える。無造作にコンソールボックスに置いてあるキーを束ねたホルダーに気付くとポケットにしまう。

「この世界のわしの家はどこだ」

「でも大金持ちの駐車場が平地の月極駐車場の一角にあるなんておかしいわ」

車を降りると水着と見間違えるような真っ赤なワンピースを着たグラマーな若い女が近づい

てくる。その横には黒いスーツに身を固めたサングラスに大きな白いマスクをしたがっちりした男がいる。

「パパ〜」

「パパ？」

田中と山本が同時に大家と女を見る。人目もはばからず女は大家に抱きついておでこにキスする。

「パパ〜。今日の服装、軽いわね」

山本は今にも笑い転げそうになるが、実直な田中が素直な質問を向ける。

「大金持ちの大家さんが、なぜこんなところに駐車するんだ？」

答えたのは大柄な男だった。マスクを通して身体に似合わない細高い声が返ってくる。

「オーナーはビルの地下駐車場が苦手なのです」

その男はそう言うのと車に乗り込む。恐らく地下駐車場に移動させるのだろう。一方で大家が何とか女から離れる。

「パパ〜。どうしたの？ それにこの人たちは誰？」

その女は田中には目もくれずに山本を睨み付ける。大家が咄嗟に応える。

「テレビ局の人だ」

「テレビ局の！」

その女は田中をテレビ局の人間だと解釈したのか山本ではなく田中に近づく。きつい香水の匂いが田中を尻込みさせる。男がなぜマスクをしていたのか、勝手に悟る。

「ぼ、僕はテレビ局の人間ではありません」

女はがっかりするが、すぐ気を取り直して山本に近づく。

「どこの放送局なの」

それまでと違ってその女の表情が一転して厳しくなる。

「取材中なので明かすことはできません」

「おかしいわね。取材するときは必ず身分を明らかにするのが礼儀よ」

この言葉に山本はたじろぐだけで声を出せない。化粧や服装から軽薄な印象を受けたが内実はまったく反対かも知れないと一歩引く。

「わしを差し置いて何を言っている」

大家は注意深く言葉を選んで女の注意を逸らす。

「パ。パ。ごめんなさい。あたし、どうしたら、いいの」

「このふたりをわしの部屋に案内しなさい」

「わかったわ。パ。パ」

*

直通高速エレベーターで百階建ての最上階に到着すると田中と山本は案内された部屋に驚

く。しかし、大家は狼狽えることなく例の女に所払いを命ずる。

「パパ。今日は妙に冷たいわね。どうしたの？　パパ」

何とか凌いでできた大家もこのセリフに対処する術を失う。もうひとりの自分とこの女との関係に当惑しながら男としてこの女から逃れる方法を模索し続けることに限界を覚える。こんな場合のセリフはひとつしかない。

「うるさい！　出て行け！」

即、女の目から涙が流れる。

「あとでちゃんと涙を拭いてやるから、そのまま隣の部屋にいろ」

女は驚きながらも最も美しい後ろ姿で部屋を出る。見送る大家に山本が感動しながら低い声で呟く。

「女の急所を心得たすごいセリフだわ。大家さん、結構、女性遍歴してたんですね」

「あほ」

豆鉄砲を食らったような山本に大家が言葉を続ける。

「経験も何もない。必死になって毒蛾を払い除けた。だが、もうひとりのわしは助平の道を選んでいた。信じられん！」

「男は女に弱いわ」

山本の言葉に大家はフーツと息を吐く。

「金だ。金が男も女も狂わせる。金が介入しないときの男と女の関係は純粋なのに、いずれ、金という現実が揺るぎない愛に介入して粉碎する」

場違いな大家の言葉に田中と山本は頷きながらも困惑する。もうひとりの大家はこの豪勢な部屋で金に任せて年齢を超越した愛の契りを結んだのかも知れない。

「さあ、これからどうするんですか」

「この世界のわしの生活ぶりを徹底的に調査する」

「自分で自分のことを調べるなんて……」

「田中さん。山本さん。改めて尋ねるが、自分自身のことを百パーセント分かっているかな？」
ふたりともキョトンとしてから首を捻る。

「例外と自分のことを知らないのかも」

「そうね。大家さんの言うとおりだわ」

大家が立派な机の引き出しを開けようとする。

「鍵が掛かっている。わしは邪魔くさがりやだから鍵を掛けない。大金持ちになったこの世界のわしは用心深くなったのかも」

田中がポケットからキーホルダーを出すと大家に渡す。大家は早速次々とキーを引き出しの鍵穴に差し込んでいく。

「これか！」

引き出しを引くと立派な鍵を見つける。大家は他人のものを勝手に覗いているような後ろめたい気持ちになる。

「あの壁に埋めこまれた大きな金庫の鍵では？」

「そうかも知れん。この鍵には番号が書かれた荷札のような紙が付いている」

大家が金庫に近づいて鍵を差し込む。そして紙の数字を見ながらおもむろに鍵穴横のテンキ―を押す。分厚いドアが開くと全員生唾を飲み込む。眩しい光が視線に染みこむ。

「金塊だらけだ」

触れることもなく大家はドアを閉めるとため息をついて机に戻る。その大家の背中に田中が声をかける。

「手帳か日記帳でもないかなあ」

「日記はないはずだ。わしは日記を付けたことがない。でも家賃の集金帳は小まめに付けていた。手帳には予定表や簡単な出来事を書きこんでいた」

「これは？」

山本が引き出しから大型の手帳を取り出す。

「わしはこんな大きなノートのような手帳を使ったことはない」

「ぎつしり書きこまれているわ。大家さんの字って読み易いわ」

そしてページを繰ると壁のカレンダーを確認する。

「これは去年の手帳だわ」

山本が手帳を取り出した引き出しから田中が他の手帳を取り出す。

「この引き出しは手帳をしまっておくところらしい」

三人は手分けして手帳に書かれた内容を確認する。そのとき、あの女が部屋に入ってくる。

「パパ。新しい通帳は？」

大家はソファアに置いた使い古した鞆を手取る。

「その鞆どうしたの。いつもの鞆じゃないわ。パパ！　パパは本当にパパなの？」

「何を言ってる」

「瓜二つだけれど、パパじゃないわ。私には分かるの」

大家はもちろん田中も山本も狼狽える。ここをどう凌ぐのか。三人とも揃って冷や汗をかく。

女は自信を持って別のドアに向かって大声を発射する。

「佐々木！」

あの体格のいい大柄な男が入ってくる。

「警察に連絡して」

「待て！」

田中が佐々木と呼ばれた大男を睨む。そして大見得を切る歌舞伎役者のようにマユを吊り上げて大きく一步踏みこむ。取りあえず啖呵を切ったまではよかったのだが、次のセリフが出な

い。

「えーと」

一方的に佐々木が田中との距離を詰める。

「パパをどうしたの！」

女の悲鳴が部屋中に響きわたる。そのとき部屋の一角からポーツとした光が浮かびあがると、四角いモノが現れてその中心部から大家の声が流れる。

*

「このテレビは！」

山本、田中、大家の順で叫び声上がる。

「なぜここに、あのテレビが！」

今度は田中、大家、山本の順に声が上がる。テレビの映像が全員の感情を一旦停止させた上でリセットして再起動させる。

「おーい」

田中や山本に付き添われた大家ではなく、立派なスーツを身にまとった大家がテレビ画面から呼びかける。

「今、わしはスミス財団が運営するニューヨークのスミス博物館におる。誤解のないように。スミソニアン博物館ではなく、ここはスミス博物館じゃ」

「パパ。本物のパパだわ！」

「この博物館には過去の近代戦争で使用された様々な武器が展示されておる。その中で一番気に入った戦闘機がある。わしは日本人だからして、通常なら零戦や隼を選ぶと思うかも知れんが、最も気に入ったのはイギリスのスピットファイアじゃ」

画面には戦闘機とは思えない美しい飛行機の画像が表示される。

「この戦闘機は美しいだけではないのじゃ。ドイツの攻撃で瀕死に落ちいったイギリスを救ったのじゃ」

「佐々木！ 私、ニューヨークに行くわ。手配して！」

気が付けば田中のすぐそばまで近づいていた佐々木が背を向けると、胸のポケットからスマートフォンを取り出しながら女に近づく。

「分かりました」

田中がフーッと息を出すと山本が部屋から出ようとする女と佐々木に声をかける。

「名前を教えてください」

「リングラング」

「変わった名前だわ。生まれは？」

「生まれはアジア。私はアジア人です」

「アジア人？」

「私はパパと一緒にアジアの平和的な統一、精神的な共有民族としてのアジア民族の結束を指しています」

男をたぶらかす尻軽女のような印象を持っていた田中や大家の目にはリングラングがまったく別人のように見え出す。人の印象がこれほど変化することに戸惑うとともに彼女に親近感さえ覚える。しかし、山本は冷静に言い放つ。

「じゃあ、ここでお別れね」

「ここはパパの家よ。出て行って！」

再び緊張した会話に戻る。

「わしが本物の大家だ」

「違うわ」

「どちらも本物です。違うのはテレビの外にいるか、内にいるかの違いだけです」

「どういう意味？」

部屋を出ようとしていたリングラングが戻ってくる。

「このテレビが原因です。よく見て！」

リングラングは山本からスピットファイアを映しだしたままのテレビに近づく。おもむろに山本がバッグから奇妙なカメラを取り出してリングラングに向けてシャッターを押す。リングラングがカメラのレンズに吸い込まれるように消える。それを見た佐々木が山本からカメラを

取り上げると床に投げつけて踏みつぶす。

「あっ！」

テレビ画面にリングラングが現れたとたん、大家共々苦しそうに倒れると画面から消える。それを見た佐々木が慌てて部屋から出て行く。

*

山本がポケットからテレビのリモコンを取り出してボタンを押すと映像が流れる。

「もうひとりの大家さんの記録映像のようだよ」

「個人情報の漏洩だ。訴えてやる。しかし、なんでこんな映像が」

三人ともしばらくの間、黙ってテレビを見つめる。そして映像が切れて真っ暗な画面になる。

「経緯がよくわかった」

「大家さんって、助平だったんですね」

「わしはそうじゃない。あの大家が助平だっただけだ」

「でも同一人物だよ」

「ぜんぜん身に覚えのない経験をしておる。わしにはとうてい同一人物には思えん」

「ニューヨークにいる大家さんは大丈夫かなあ。リングラングも」

田中が粉々になったカメラを見つめる。

「カメラが壊されたのと大家さんたちが倒れたのが同時だったけど、このカメラにどんな仕掛

けがあるんだ？」

山本が黙ったまま中途半端な頷き方をする。

「要は、仕掛けがないと言えばウソになると言うことか」

仕方なく山本が首を縦に振る。

「私はこのテレビやカメラのことをよく知りません。このテレビとカメラが一組になっていることだけは確かです」

「カメラが壊れたからと言って、たとえば、その中に映像として閉じ込められていても、その人がこの世から消滅することはないんだな？」

珍しく田中が鋭く迫る。山本は田中の分析に驚きながら頷いて見せる。

「大家さん。これからどうします」

「この世界の大家が消えてしまった以上、わしもどこかに行ってしまうのかな。いや、わしはわしだ。わしはわしが何をしてきたのか、じっくりと観察してみたい」

「銀行員や支店長は違和感なしに、しかも本人確認せずに大家さんに通帳を渡したわ」

「身分証明証の提示を求められたら、どうなっていたんだらう」

「取りあえず、この部屋を拠点に現状を把握しましょう」

*

「所詮、限られたところに偶然あったレアメタルだから、埋蔵量は知れている」

「でも、レアメタルはその名のとおり、少なくとも貴重な金属よ」

田中は山本に頷くが話題を変える。

「ところで、このテレビ、アパートにあったテレビと同じものか」

「アパートにテレビがなかったとしても、これがあのテレビと同じものだと言言できないわね」

「それに何の放送もない」

「以前ならテレビの前で催促すると勝手に電源が入って反応してくれたのになあ」

すると電源が入る。

「素直なテレビね。まるで田中さんみたい」

と言いながら、「逆田が現れるかも知れない」という山本の期待は裏切られる。画面上部に

「メニュー」という文字が表示されると、その下に項目が現れる。

「一、除染費用の二割が特殊法人に」

「二、中国レアメタル大幅値引き」

「三、新種の昆虫発見。その名はアリギリス」

「四、……」

第二十一章
ピンハネ特殊法人

「放射性物質除染後の土や瓦礫の仮置き場の決定に数年もかけて、やっと除染作業に入ったと思ったら、その費用の予算額の二十パーセントが高級官僚の天下り先の特殊法人にピンハネさ
れているなんて！」

田中が憤慨する。

「しかも、除染作業の際に使用する線量計を鉛のケースに入れて放射線量を低く計測して、安
全性をアピールするなんて許せないわ」

珍しく山本も興奮する。そしてそのままの勢いで続ける。

「もっと許せないことがある。復興のためと震災特別税を集めておきながら、被災地以外の都
府県に復興予算を使っているのよ」

「まさか」

例のテレビの画面がにわかにもろくなくなると音声が届いてくる。

「復興予算でなぜ沖縄県の道路整備ができるのでしょうか」

画面には海辺の道路の護岸工事が行われている。その画面が消えると国土交通省のある担当
課長が現れる。

「震災を教訓にして海辺の道路を大津波に耐えるよう補強工事するのは、そこで培われた技術
が回り回って被災地の道路の建設に役立つからです」

「うまいことを言うな」

「中央官庁の役人は私たちとはここが違うの」

山本が笑いながら頭を指す。田中は首を捻りながら異議を申し立てる。

「でも、どう考えてもおかしい。震災復興予算というのは被災した場所に直接投入すべきだ」

「そのとおりだわ」

画面の某担当課長は悪びれるどころか『反論するなら、して見ろ』と薄ら笑いすら浮かべる。

田中とまったく同じ質問が画面のどこかからこの課長に向けられるが軽く往なされる。

「この沖縄での工事で得られた貴重なデータが被災地の迅速かつ意義のある復興に繋がります。まさしく震災復興予算の趣旨に添うものです」

画面から勝ち誇ったように胸を張る課長が消えて工事現場が映し出される。いつの間にか山本がテレビの中に移動している。

この工事の責任者と思われるヘルメットをかぶった中年の男にマイクが向けられる。

「この工事が震災増税で賄われた震災復興予算で行われているのをご存知ですか？」

「えー！」

山本が資料を責任者に手渡す。その資料と同じものが画面右半分に表示される。しばらくするとその責任者の日焼けした顔に深いシワが刻まれる。

「この工事に予算を付けて頂いたことには感謝しますが、本来は東北の被災地に投入すべきでしょう」

素直な返答に田中が頷く。

「正直な人だ」

その責任者の言葉が続く。

「この工事の予算、一旦返上して、何年かかってもいいから通常の予算でお願いしたいものだ」

山本が頷いて先ほどの某課長の意見を紹介すると、その責任者はすぐさま否定する。

「なるほどとすぐ納得できる話ではない。私は現場では偉そうなことも言うが、現場の苦労は知っている。本当にこの道路がいかにこの付近では大事な道かも理解している。でも震災で苦労している方々の予算を、理屈はともあれ、この道路には使いたくない」

そしてその場で土下座する。

「被災者の皆さん、申し訳ありません」

その映像を見た田中が思わず涙を流す。

「頭のいいヤツがどんなに理屈をこねようと、現場で汗を流して直接作業員の安全に気を配りながら働く人に感激した」

画面には某課長と土下座した現場責任者の顔が左右に並べられる。そしてまず某課長のそれまでのセリフが、そのあとと同じく現場責任者のセリフが字幕とともに繰り返し流される。

*

「いくら頭がよくても思いやりはない。まるで屁理屈も理屈の区別もつかないなんて。こんな

人ばかりが中央官庁の高級官僚だったら日本はどうしようもないわ」

「それに引き替え、この現場の責任者は人間味溢れるなあ。それこそこんな人が中央官庁の官僚になるべきだ」

年甲斐もなく大家も感動の余り普通は出ないはずの涙を絞り出す。

「わしの友人にシルバー人材センターに登録している者がいたが、そいつが仕事中にケガをした。不思議なことにケガの治療に健康保険も労災保険も使えんと言うのだ」

「じゃ治療費は全額自己負担になるんだ。酷な話だな」

「それはね。シルバー人材センターに雇われているんじゃないからなの。あるいは依頼された仕事だから、依頼した人に雇われているということでもないの。だから労災保険は使えない。それに作業中のケガには健康保険は使えないわ」

山本の言葉に田中が憤慨する。

「それこそ厚生労働省の保険の担当課長が得意の屁理屈をこねてお年寄りを救済してあげればいいのに」

「そんなところでは正論しか言わないのよ。これがこの国の官僚の本質なの」

「そうか。その友人はこの間、そのケガが原因で亡くなった」

少し流しただけの涙がもう涸れてしまったのか、大家が気を取り直して総括する。

「どんどん新しい箱物を作る時代は終わった。そもそも日頃から不断なく危険な道路や橋や建

物がなにか点検してまずそこへ予算を投入すべきだ。日本の社会資本はかなり老朽化しておる。そんな大事なことを後回しにしておるから、地震や津波の被害が想定以上にひどくなる。それに原発がやられて放射能に汚染されたと言うのに除染作業も進まず五年も経った。未だ復興どころか復旧にもほど遠い状況だ。これじゃ、震災復興に名を借りた税金の横領だ」

*

画面が大幅に変わる。画面には図式が映されている。どうやらこれまでのことは横道に逸れた話で本題に入る準備が始まる。さて除染作業の予算額五千億円から始まって一連の金の流れが示されている。概略を説明する音声が流れる。

「まず特殊法人放射能研究機構に五千億円が渡ります。そしてこの特殊法人が実際に除染作業を行う複数業者に四千億円を作業の進行にに応じて支払うこととなります。さて、残りの千億円については次のような説明があります」

画面が変わって「取扱注意（極秘）」という文書が表示される。その文書の中でハイライトした文字が読み上げられる。

「……つまり、除染作業を確実にに行えるかどうか、業者の財務の健全性、従業員の資質、組織としての技術力の調査など業者の選定。選定された業者に対して作業地域の指定と開始時期、作業日時の地元との打ち合わせ方法及び作業方法の教育研修指導に留意すべき注意事項の周知。更に業務の報告義務の周知とその報告様式の作成などの極めてきめ細かい業務に対して、

千億円程度の経費が必要……」

田中、大家そして山本が驚嘆するほどの特殊法人の言い分を簡潔（実際は複雑）明瞭（実際は難解）に表した文章だった。

そして、だめ押しの言い訳も用意されていた。この文章の最後の方が読み上げられる。

「このような業務は本来政府の仕事だが、余りにも専門過ぎてしかも多忙な政府には過重な負担が掛かるので専門家集団の特殊法人が手助けすることが、国民の利益に叶っていることは説明するまでもない。しかも政府の中枢で実務経験を積みあげた官僚が最もふさわしい能力を持っている。本来、もっと多額の費用が掛かるが、すでにそれなりの退職金を受け取った彼らができるだけコストの掛からない方法で、場合によっては無償で業務をこなすが、かといってまったくコストが掛からないという訳にはいかない。今回は除染作業だが、国民が納得できるように確実に実行するにはそれなりのコストが掛かる。なにとぞご理解のほどお願いしたい」

「迷文だ！ 感激した」

田中が大袈裟に言うとうと山本が応じる。

「プロの詐欺師も脱帽ね」

「詐欺師の先生は官僚だったんだ」

「詐欺は国の独占事業だ。誰も真似できん」

大家が締めくくる。田中がキョトンとして大家を見つめる。

「振り込め詐欺は？」

「振り込め詐欺の被害者並びに関係者には心よりお見舞い申しあげますが、国の詐欺による被害に比べれば大したことはない。更に問題なのは、国民がこのような非公開の文書の存在を知らないばかりか、国民の了解など関係なしに特殊法人が災害関連の予算を勝手に取り仕切っていることだ。さっきの震災予算とまったく同じだ」

自信たつぷりの大家の言葉に田中はただ弱々しく首を横に振るだけでそのままうなだれる。大家の言葉が続く。

「先の大戦中にした政府の巨大詐欺行為については学校の授業で聞いているだろ？」

「いいえ」

田中と山本が声を揃えて大家にぶつけてから、お互いの顔を見合わす。

「今の教育はなっとらん。反省すべきは反省して、正論は正論として認識させることをまったく考えていない」

「大家さんの言う戦争中の巨大詐欺のことはうつつすらと分かります。負けているのに『勝った、勝った』とウソの報道ばかりしたんでしょ」

「そのとおり！」

大家が背伸びして田中の肩を叩く。

「そう言う意味では被害者の心痛は別にして、詐欺の規模が違うわね」

「分かってくれたようだ」

「でも、そのような詐欺を政府ができないように選挙で議員を選んでいるんですよ」

「制度上、それで歯止めをしていることにはなっている」

「違うんですか」

「三権分立という制度を知っておるか？」

「はい」

「それでは三権とは？」

「国会、行政、裁判所」

「建前はそうだ」

「建前？」

「国会。この構成員は国会議員だ。行政を構成しているのは公務員だ。言うまでもないが裁判官が裁判所を構成しておく」

田中と山本はいったい大家が何を言いたいのか分からず当惑する。しかし。大家の顔は輝いている。

「裁判所にも問題はあるが、それはこっちに置いて、行政の最高意思決定機関を内閣というがこの内閣のメンバーである大臣というのは誰がなるのだ？」

「総理大臣も含めて国会議員ですね。これを議院内閣制と言いますよね」

「そのとおり。さて総理大臣はあっちへ置いといて、大臣は本当に国会議員でないとなれんのか？」

「数は少ないけれど民間からの登用がありました。私、民間出身の何人かを取材したことがあります。大臣は必ずしも国会議員だということはありませんね」

「さすが、山本さん。そのとおりだ。過半数が国会議員でなければならんというルールさえ守れば、あとは民間人でもかまわん」

「でも、大概国会議員が大臣、つまりこういうことか。国会の構成員でありながら、行政の最高責任者にもなるんだ。国会議員は」

「それまで行政を批判していたのに、大臣になったとたん、その省の利益ばかりを守る発言をしますね。そのカラクリが今、理解できました」

「わしは『議院、内閣制』ではなく『議員、内閣制』だと思っておる」
「なるほど！」

「『末は博士か大臣か』と言われたことがあつたぐらい大臣というのは偉いポストだ」

「そんな言葉、聞いたことがないわ」

「でも、たとえば大蔵大臣だからと言って、金融のプロが日本銀行の総裁になるように、財務のプロが大蔵大臣になるのではない。大蔵省の事務次官、いわゆる事務方である公務員の支えがなければ大蔵大臣の職責を果たすことはできん」

「大家さんよくご存知ですね。事務次官は各省庁のつまり行政の実質的なトップで、その省に
関わる仕事の専門家だわ。だから大臣に人事権はないの」

「でも、任命したり、ときどき首にしたりするじゃないか」

「それはあきれるほどの不祥事を起こせば、かばいきれないからよ」

「名大臣として名前を後世に残そうとすれば、事務方の協力が必要だということか」

「実力者の事務次官は大臣のように後世に名を残すことはない」

大家と田中の発言が一旦停止したのを確認してから山本が続ける。

「でも、事務次官を筆頭にいわゆる官僚、キャリア組という人よりもノンキャリア組と言われる一般の公務員の方が現場をよく知っている。キャリア組は現場より自分の出世を考えて仕事をするのが常です」

「いずれにしても大臣なんて飾り物か」

「名前が残る。だから大臣になりたいのだ。それほど政治家にとって魅力的なポストじゃ」

「それに大臣になれば自分の選挙区に金を落とすような施策ができるわ。もちろん官僚の助言と協力があってのことですが」

「官僚は大臣の要望を見逃さない。両者は魚心あれば水心の関係だ。官僚は大臣に貸しを作っ
ていくのだ」

「行政の詐欺行為を監視するはずの選挙で選ばれた国会議員が国民を欺くかも知れない行政の

トップになると言うことは、結局、国民は身内に裏切られるようなものね」

「なんか、大家さんと山本さんの話を聞いていると選挙に行く気がしなくなるなあ」

「こうなれば、自分たちの既得権を守るために両者は結束して国民をいかに騙そうかという詐欺の道突き進むことになる。バカバカしいからと選挙に行かなくなる人が多くなると、政府に都合のいい議員に票が集中するようになって、益々勝手なことをするようになる。だから選挙には行くべきだ」

大家が田中を諭す。

「分かりました。選挙には行きます。ところで先ほどの特殊法人が二十パーセントピンハネするために詐術を使うということはよく分かりましたが、マスコミが許さないし、国民もそこまでするバカではないんじゃない？」

山本が目を閉じて解説を始める。

「私がいた放送局は行政の不正を追及するのが使命のような会社でした。でも他の放送局は、たとえば今回の除染作業には恐らく今から説明するような方法でピンハネの正当性を弁明するでしょう」

山本は気付かないが、その筋書きをドラマ風に構成した映像がテレビに流れる。大家も田中も、そして山本も怒りをもってそのビデオを真剣に見つめる。まず大家の顔が真っ赤になる。

第二十二章
公約と詐欺

「なるほど」

田中が小膝を叩くと画面が消える。

「日本人の『和』を大切にすると素直な心を逆手にとって、特殊法人が民間会社に除染作業を割り振っていくプロセスはすごかった。失業した地元の人をできるだけ雇用するように指導して、積極的にこの指導に従う企業には広い地域を割り振る。一方、余り積極的ではない企業には狭くて作業しづらい地域を割り振る。それ自体はいい行政指導のように見えるのがミソですね。その割り振りがピンハネの隠れ蓑に過ぎず、その決定過程が問題だというのもよく分かりました。本当にうまく監督官庁の意向を汲み入れているなあ」

田中が一気に感想を披露する。

「でも、ここで最強の批判者が登場します。それは最近まで与党だった最大野党の民主自由党です。でも今の政権与党はその民主自由党が与党だったところと同じ答弁で切り返すから、民主自由党は責めきれない。自分たちが与党の時代に様々な矛盾の種を蒔いてきたから当然と言えば当然なんです、とにかく追求に迫力がないわ」

田中が大きく頷く。

「ここで再び『和』の精神が登場するような気がする」

「現与党と元与党の民主自由党が手を組んで、それぞれの党内で文句を言う党員はもちろんなこと、いつも絶対反対の少数野党の党員も含め、反対する議員の体力が消耗した時を見計らっ

て与党議員が結束します。そして一気に多数決の論理で突破します。もちろん衰弱した反対意見に対しては『和』という言葉をもって息の根を止めます。もはや反対するなどできない雰囲気を作り上げるとマスコミにも有無を言わせません」

「誰もが批判できない『和』という言葉を使って、政策を批判する気力や雰囲気を取り上げるというやり方か」

「何も今回の特殊法人のピンハネに限ったことではないと思いますが、だからといって振り込め詐欺を許容しているわけではありません。国家の詐欺に国民は抵抗のしようがないという現実を知って欲しいのです。手口は非常に巧妙なので自ら選んだ地元議員に騙されるということでもありません。選出した地元議員なら利益誘導が期待できます。でもそれはその議員一人だけです。でも大臣になった議員はその議員に投票した地元の人を除くと、全国民から見ても詐欺師以外の何ものでもありません。さて国家の詐欺を具体的な事例で考えましょう。余りにも長期に亘る政策、その代表格は年金制度です。『和を以て』という大義でごまかし易い制度です。しかし、散々騙され続けていたので、総理大臣や厚生担当大臣が制度を変えようと一歩前に踏みだしても騙されまいと国民が抵抗しますから、一歩進むどころか足を上げることすらできません。すでに国家が国民を欺く組織だと見透かされているからです。それこそ大家さんが言っていたように日本人は戦争を契機に政府を信用しなくなりました。これが根本原因では？」

「よく気が付いてくれた。負ければ当然懺悔しなければならぬ。これは戦争がもたらす必然

的な結果だ。それは国民ではなく責任者の義務じゃ。しかし、その責任者は謝るどころか開き直る。その結果、国民は戦後の厳しい状況の中、無意識のうちに卑屈感を背負ったのじゃ」

理路整然と説明する山本と大家に田中がクレームを付ける。

「テンポが速すぎる。もう少しかみ砕いて欲しいな」

大家は「何が」という表情をするが、山本は田中の気持ちを受けとめる。

「ごめんなさい。自分の結論に振り回されて少し独善的になっちゃったわね。うーん」

山本は一呼吸置くが田中はそれまでの話を整理しながら次の言葉を待つ。ようやく山本が口を開く。

「テンポが速いというよりは、映像で理解して貰っているという思い込みが強かったんだわ」

「そんなことはありません。飲み込みが遅いだけなんです」

田中がすぐさま否定するが山本が続ける。

「でも結論を急ぐわ。一言で言えば騙され続けた国民が騙されまいと知恵を絞った結果、今の政治体制ができあがった。つまり衆議院と参議院の第一党を別の党になるように投票して、矛盾が見え易くしたのよ」

「やむを得ない選択だと言うことは分かるけど、結局はその二党が結束してしまうんだろ」

「そうです。古い与党は自分たちの過去の失政を表面化させたくないし、新たに政権についた元野党である与党はいいかっこをしたいけれど、現実には厳しく自分たちの思うように政策を実

行できない。そのうち行き詰まって批判していた旧与党の政策と余り変わらなくなってしまふ。結局、国民は昔と同じようにアクセルとブレーキの両方を取り上げられて動けなくなってしまう。ましてや大災害が起こって被害を受けても救済されない最悪の状況に甘んじなければならなくなつた」

「与党も元与党の野党も元々ひとつだったのに、いつの間にか分裂した。根は同じなのに」

「そのとおりだわ。立派に見えるビルから全室借り切っていたテナントを追い出したけれど、中は修繕もできないほどボロボロで結局は同じような使い方しかできない」

「なるほど！」

「でもこれは日本だけの問題？ そんなことはないか。どこの国でも多かれ少なかれそうなんだろうな」

「田中さんの今の言葉は政府や政治家がよく使う理屈です。『世界的にはこうです。だからこうしなければ』とか『先進国と比べて決して悪い水準ではありません』とか都合のいい統計を並べ立てて、しかも改ざんさえして、本物の詐欺師あるいは手品師顔負けの口で国民を騙します」

「山本さん。ちょっと待って」

「テンポが速いの？」

「何とか、ついて行ってます」

田中は先ほどから気になっていたことを言葉にする。

「山本さん。今日とは言うより……事故を起こした原子力発電所の取材、グレーデッドとの関わり、サブマリン八〇八との遭遇……。とにかく、以前の山本さんとは違う」

やつと大家が口を開く。

「田中さんの言うとおりで」

我が意を得たりと田中が続ける。

「時間に翻弄されている大家さんや僕より、山本さんの方が落ち着きがないように見える」
大家が大きく頷く。

「私はいったい何を言おうとしていたのかしら」

「変な政策を実行させないように衆議院と参議院の第一党を別々の党にするまでは国民の知恵が勝っていたが、この両党が結託すれば、国民は再び騙されてしまうと……」

「そうだったわ。それを何とかしなければと私がいた放送局は政府や関係機関に突っ込みましたが、国民の支持を集めるほどの成果はなかった」

「それどころか、潰れてしまったんだろ」

『『ペン』は武器よりも強し』という言葉を私は『マスコミは銃で撃たれる覚悟で庶民に事実を伝えるのが使命』だと解釈しています」

「政治家は？ 選挙演説を聴いているとマスコミ以上に選挙民に矛盾やなすべきことを公明正

大に伝え、命を賭けて実行していくと大声で訴えている」

「当選したら、その公約自体、詐欺になってしまう」

「そのとおりだ。まさしく公約違反は詐欺と同じ。だから選挙演説は当選した暁には詐欺師になりますよという予告編みたいなもの」

「そうなら、誰も投票しない」

「予告編すら見ずに棄権します。投票率が低いのはそのためです」

「もしも立候補者全員が詐欺師だったら、田中さん、あなたならどうしますか」

「！」

自分のペースを失った田中はその質問に答えず口を尖らす。応じたのは大家だった。

「わしの長い経験から言うと、言い訳などせずに公約どおり行動して国民から『なるほど』と絶賛された政治家など皆無だ」

「当たり前前にこの顔いて自然に発する『なるほど』という言葉が絶賛を意味するなんて、おかしい。立候補者全員が詐欺師になる予告編ばかり吹聴するのなら選挙には行かない」

「なんだ！ さつき、選挙に行くと言っていたのに。政党という巨大組織の詐欺にいかんともしがたいという気持ちは分かるが抵抗を試みるべきだ。そうだろう？ 田中さん」

「まるで大地震後の大津波に立ち向かうようなものですね。来るべき津波の高さやエネルギーの規模も知ることなく、素手で立ち向かう。負けることが目に見えていても、それで死ぬこと

になろうとも、そして死なずに生き残ったとしても、どちらの道も……」

山本が肯定するのでもなく否定するのでもなく田中を制して抑揚のない声を出す。

「その道の先に国民が選挙で選んだ詐欺師が立ちふさがっているとしたら」

「それは絶望です」

即座に反応したあと田中の目に涙がたまる。

「すぐ、被災地に行けばよかった。友達もいた」

感情的な田中に山本の言葉が冷たく迫る。

「なぜ、震災からの復興ではなく、未だ復旧すらできないのか、田中さん、分かりますか」

「分かりません！ 教えてください！」

田中の質問に山本が首を横に振って応える。

「私にもよく分からない。相手は巨大な詐欺師です。いえ、今やブラックホールです。吸い込まれたら外に出ることはできません。地震から六年近く経ちました。そして経済的には失われた十年の第一ステージが終わり、第二ステージに突入して、そして第三……。その間に名だたる企業、そして資産家も海外に逃げる。地震が多く津波が押しよせる。火山が噴火する。豪雨で山が崩れ家は押し潰されて洪水で水浸しになる。そうすると詐欺師もこの国から脱出します」

「要はこの国から逃げるのが一番だという対策しかなかった。でももう少し明るい展望は？ 貧乏人か騙された者しか日本にいなくなるなんて」

フーツと山本が息を吐きだす。そしてうなだれる。感情的になっていた田中の熱が山本に感染する。

「私、間違っていたわ」

急変した山本に田中は驚きながらも目を逸らさない。山本はその視線にムチで打たれたように身体を激しく震わせる。

「そうだわ。田中さん！」

熱を帯びていた田中は熱を奪われたかのように冷静に山本を見つめる。大家は興味深くふたりに見つめるだけで意見は挟まない。先ほどまでの冷静さがウソのように山本がはばかりることなく涙を流しながら、しかし、明瞭に言葉を繋いでいく。

「私、これまで厳しく真実を追究することばかり考えて行動してきました。そこに照明を当ててきたつもりでした。でも思い返せばそれは冷たい照明でした。『写真』とは真実を写すことです、その写真に魂が込められなければ見る人に感動を与えることはできないとある偉大な写真家が言っていたのに、冷たい照明を当てて撮影するだけでした。だから、私たちの報道は視聴者の興味を誘っても共感を得ることができなかつたし、気持ちの共有もできなかつた」

背の低い大家が山本の手を握ると見上げる。

「山本さん。よく気が付いた。確かにマスコミは国民の興味をいかに引き出すかだけの報道ばかりしてきた。起こってしまった事件ばかりを追いかけるだけで、未然に起こっては困る事柄

を見つけて対策を提案することはほとんどなかった。そのうち政治家や高級官僚はマスコミの欠点を熟知して逃げるコツを覚えた。結局、脇の甘い政治家や官僚だけがマスコミの餌食になるだけで、知恵の長けた政治家や高級官僚はうまくマスコミの攻撃を避けた。いわゆる知恵比べだ。それも悪知恵だ」

素直に山本も田中も大家の話に聞き入る。

「政治家だけが悪いのではなく、マスコミも悪いのかも知れん。だが、そうではない。国民が悪いのか。そうでもない。永きに亘って、社会の安定が続けばどうしても誰もが保守的になってしまうものだ。もちろん不断の努力で革新的な行動をする人は数えきれないほどいる。しかし安定した時代が永く続けば相対的にそのような人が少なくなり、利害関係はもつれた糸のようになり、誰もが既得権を拡大させることに奔走し、それを脅かす者を排除しようとする。前向きな競争は減って屁理屈の論争で身動きできなくなって、お互いの足が絡まって共倒れになる。このような閉塞感に満ちた底なし沼から這い出さなければならん。溺れかける者を助けなければならんが、その状況をつぶさにかつ正確に見つめ知らしめることが必要だ。それなのにマスコミはいつの間にかその役割を放棄して自らの既得権を傘にして乾いた道しか歩かなくなってしまった。特にテレビはどうだ。まともな番組があるか。この国のことを真剣に考えた番組は数えるほどしかない。しかも日々のニュースなんか独自の切り口などないコピー番組だ」

大家の蕩々とした正論の一言一言に山本が大きく頷きながら聞き入る。

「わしはこのテレビが好きだ。田中さんの部屋に入り浸りになるぐらいこのテレビの映像に興味をもった」

「このテレビを通じて放送するテレビ局にですね」

「いつの間にか柔和な表情をたたえた田中が頷く。」

「そうだ。逆田さんはどうした？ それに放送が極端に少なくなっている」

「分かりません。でも放送会社は完全には潰れていません」

「そもそも、山本さんや逆田さんが勤務していた会社はどこにあるんだ？」

田中の疑問に山本が沈黙する。

「報道の自由、だが報道者の身元というのか、責任者の所在を明らかにすべきだ。放送源の秘密を担保するには報道者自身が潔白でなければならんぞ」

「大家の鋭い眼光が山本を貫く。狼狽えることもなく山本は観念したように白状する。」

「ごもつともです。私の所属するテレビ放送会社の本社はアメリカのニューヨークにあります。スポンサーはスミス財団です」

「外国籍の組織は日本の放送会社を勝手に支配できないはずだ」

「大家さん、よくご存知ですね」

「いや、憲法上の言論の自由は日本国民に与えられたものだ。諸外国のマスコミが日本で勝手に放送することはできないと思っただけだ」

「そのとおりです」

「それじゃ、どうして放送できるんだ？」

「専用のテレビを使います」

「このテレビのことか」

田中が驚いて山本を見すえると、山本が「田中さん」と静かに応える。田中は催眠術に掛かったように頷いて発言を止める。ふたりの雰囲気から何かを感じとった大家が山本に提案する。

「もうひとりのわしがなぜニューヨークにいるのか調べる必要があるのう」

山本はすでに覚悟を決めたらしく大きく頷いてから視線を田中に向ける。

「田中さん。あなたのお祖父さんに会えるかもしれないわ」

平常心を保って山本の頷く反応に満足していた大家はもちろん、田中が絶句する。

「どうということだ？」

大家が田中と山本を交互に見つめる。よくよく考えもせずにあのテレビを手に入れた田中を、様々な事件とは関わりがないごくありふれた若者だと、まったく考慮外としていた。逆に少し考えれば、なぜ田中があのような不思議なテレビを購入できたのかという検証をしたことはなかった。山本が田中の手を取って大家を見つめる。

「行きましようか」

第二十三章
合体

田中、山本、大家に乗った旅客機がニューヨーク空港に着陸すると真っ黒なリムジンが近づ

いてくる。入国手続することなく三人はそのリムジンに乗り込む。ゆったりとした後部座席でスミスが口を開く。

「お荷物のことは心配しないでください。間違いなく、お手元に届けさせますから」

そして握手を求めるスミスにそんなことはどうでもいいと言わんばかりに大家が質問する。

「もうひとりのわしはどこにいる」

スミスは腕を引いて軽く横に広げる。

「なぜ同じ人間がふたり存在しているのか。不思議だ」

「そうなんです。意思疎通もないまったくの別人格の人間のように見えますが、指紋はもちろんのことDNAもまったく同じなんです」

「そんなこといつ調べたんだ？」

田中が山本に食ってかかる。

「そうじゃ！ 田中さんの言うとおりで」

「それは秘密」

山本にはぐらかされて大家が不満をぶちまけるがスミスがにこやかに割って入る。

「こんな摩訶不思議な話がある男にすれば、その男は飛んで跳ねて大喜びするに違いない」

「どういうことですか」

「不可思議な謎に挑戦するのが三度の飯より好きな男がいる」

「それは誰ですか？ 是非、紹介してください」

今度は自分がかぐらかされたように山本がスマスを不満げに見つめる。

「いずれな。今は海の底で謎の物体と格闘中だ」

スマスが大声を出して腹の底から笑う。

「その人とはしばらくお会いできないということですね」

「ミスひろみ。あなたからは様々な情報をいただいた。改めてお礼を申しあげる」

初めて田中は山本の名前を知る。

「逆です。ニューヨークの支局勤務時代、スマスさんには取材を通じて情報だけでなく、貴重な意見を頂戴しました。私の方こそお礼を申しあげなければ……」

「しかし、ミスひろみ、あなたは若いままですね」

「スマスさんこそ」

「私は老人だ。一旦老人になればずっと老人だ」

「私が言いたいのは初老のままだということですよ」

むきになる娘、いや孫娘のような山本にスマスはやさしい口調で話題を変える。

「フロリダ付近の地底湖の話、覚えているかな」

「もちろんですとも。まるでお伽噺のような楽しい物語でしたわ」

「その近くで面白いことが起こるはずだ」

「わしや、もうひとりのわしに関係のあることですか」

スミスは頭を掻いて山本から大家に視線を移す。

「久しぶりに娘に会ったものだから……でも大家さんとまったく無縁な話でもない」

突然、ドアが開く。リムジンが停車したことすら気が付かない三人が驚いてドア越しに外を見つめる。

「スミス博物館に到着しました」

*

「すべて案内すると一週間以上かかります」

「それより、もうひとりのわしが今どこにいるのか教えて欲しいのだが」

「もうひとりの大家さんがここで興味を示した展示物を案内しようと思っただけですが、先に進みましょうか」

スミスの言う「先」という意味が理解できないまま大家は一步引く。

「やっぱり見学させてください」

山本が大家に代わって頼みこむ。

「もうひとりの大家さんがここで一番興味を抱いたのは……」

スミスは広い部屋に入ると天井の一角を指し示す。その方向にはフロートをはいた単発のプロペラ機が吊り下げられている。

『彗星』という水上機です。イギリスの戦闘機スピットファイアは別格として世界一美しい水上戦闘機だと、もうひとりの大家さんが言っていました。同感だと応えるところに私の手を握りました」

すぐさま大家が応じる。

「水上機にしては運動性能がよいが、フロートを外せばスピットファイアのような無敵の戦闘機になるのかと言えば、それが不思議なことに大して速度は上がらない」

スミスが年甲斐もなく目を丸くして大家を見つめる。

「もうひとりの大家さんもまったく同じことをおっしゃっていました」

大家が背の高いスミスに近づいて見上げる。

「こんなことも言っていなかったか？ 『フロートをつけて三人乗り込んだときに最高の性能が発揮できるように設計された水上戦闘機だ』と」

スミスが大家の手を取る。

「一字一句同じです」

感極まるふたりをよそに田中が彗星に近づく。

「今にも飛び立ちそうな感じがする」

スミスが大家から手を離すと田中に応える。

「給油すればすぐ飛べるように整備されています。それに新兵器も装備しています。もちろん

最新鋭のジェット戦闘機と互角に渡り合うことは不可能ですが、結構いい勝負になるかも知れません。ちょうど旧式のサブマリン八〇八が最新鋭のグレーデッドの潜水艦と戦ったように」

「?!」

スミスの話の展開に山本が大きく目を見開く。そんな山本を気にも止めずにスミスは「ほっ、ほっ、ほっ」と笑うと隣の部屋に向かう。

その後ろ姿に向かって山本が叫ぶ。

「なぜ、サブマリン八〇八のことを話題に出したのですか。ひょっとして今海底で謎の物体と格闘中だという男と何か関連でもあるのですか」

山本は走り出すとスミスの前に出る。笑顔を消すとスミスは背広のポケットから折りたたみ式のタブレットを取り出す。

「ミスひろみ。急用ができました。ここで失礼します。誰かに空港まで送らせますから安心してください」

急迫した事態がスミスに迫っていることは明らかだが、山本にとって初めて見る緊張した表情に記者としての本能が頭をもたげる。

「私も一緒に行くわ!」

腕を取ろうとする山本を払い除けるとスミスは背中を向ける。驚いた山本にスミスは言い訳気味の言葉を贈る。

「ミスひろみ。少しだけ時間を下さい。必ず面白い話を携えて戻りますから」
ミスミスはそこから姿を消す。

*

ニューヨーク空港の混雑するロビーで搭乗手続きをしながら大家在田中と山本に呟く。

「もうひとりのわしはどうなったんだ？」

質素な服の大家の疑問に田中が続く。

「それにあの女やがっちりした男は？」

「結局、ヒントらしいヒントもなかった。あのミスミというアメリカ人は食わせ者か」

大家に山本が頭を下げる。

「ミスミさんも手を尽くしています。そのうち見つかるわ」

山本に田中が同調する。

「ミスミさんは信頼できる。山本さんを実の娘のように思っている」

「わかった。別に山本さんを責めているんじゃない。逆に感謝している。ここはミスミに任せ
るしかないか」

ようやく大家在納得する。

「何か起きたら、必ずミスミさんは私に連絡してくれるはずです。安心して下さい」

山本の笑顔に大家在頷くと搭乗手続きが終わる。そのとき聞き覚えのある独特の声が三人に

届く。

「パパ〜」

大きな団子をふたつ胸元に引っ付けた女が老人とじゃれている。すぐさま大家がまっしぐらにその老人に向かう。ニューヨーク空港の混み合った出発ロビーで背が低い大家は人の間をすり抜けるようにもうひとりだけの大家に向かって走る。

「パパ？！」

「お前は誰だ」

「わしじゃ」

そのとき地震のような大きな揺れが起こってロビーの天井にテレビが現れる。極端に枠の幅が広い巨大なテレビだ。そのテレビから緊急ニュースが流れる。

「メキシコ湾で異変が発生しました。地震ではありません」

しかし、ロビーに居合わせる数多い人々の誰ひとりも反応しない。右往左往しているのはふたりの大家と田中と山本、そしてあの女、リングラングとあの男、佐々木だけだった。

「いったい何が起ころの！」

山本が狼狽えるが田中たちは天井を見上げるだけで何もできない。その後すぐにふたりの大家、山本、田中、リングラング、佐々木の六人が天井のテレビに吸い込まれる。余程そのテレビの中が窮屈なのか揉み合いになる。平面化したような山本とリングラングが重なる。

「何をするの！」

山本が叫ぶとリングラングも大声をあげる。

「離れてよ。汚らわしい」

「失礼だわ！」

透過したように見えるふたりのうち、リングラングが山本の胸ぐらを掴むと押し倒そうとする。山本も負けてはいない。

「やめろ！」

ふたりの大家と田中と佐々木が止めに入るが、どうしようもない。空港ロビーの人々がようやく天井の巨大なテレビに気付いてまるで喜劇でも見るように爆笑する。

「何だ、あれは」

「紙みたいな薄っぺらい人間が重なりあってもがいているぞ」

大きな歓声の中でふたりの女が完全に重なりと一瞬色が消える。そして色を取り戻すとひとりの女になってしまう。まったく容姿の異なるふたりの女がひとりの女となった。体型はリングラングに近いが顔は山本に似ている。テレビ画面を見つめる人々にはそう見えた。精巧なCG（コンピュータグラフィックス）を見せられたと思ったのか大きな拍手が上がる。

今度は華奢な田中と筋骨隆々の佐々木とが重なる。そして同じように合体する。大柄な佐々木を一回りも二回りも縮ませたような体型に変化するが顔はどちらにも似ている。どうやら元

々田中と佐々木の顔のパーツは配置も含めてよく似ていたのかも知れない。こちらの合体の方が受けが良かったのか前より拍手が大きい。画面上では残されたふたりの大家がぼう然としてたたずむ。

「わしらもひとつになるのか」

一方の大家が叫ぶと、もう一方の大家が気持ち悪そうに離れる。ロビーにいる観客の中で何人かが叫ぶ。

「このふたりが合体しても面白くないな」

「双子の老人か」

「双子が合体しても意味ないぞ」

そんな言葉に安心したのかふたりの大家が近づく。

一方画面は黒くなってテレビそのものが消滅する。ロビーにいた人があ然として天井を見渡すとテレビがあつた方から声だけが聞こえてくる。

「メキシコ湾に巨大な穴が開いて海水がどんどん吸い込まれています！」

*

「本当にあなたは田中さんか？」

ふたりのうち、質素な服を着た大家が少し縮んだとはいえ筋骨隆々のたくましい体つきになった田中に尋ねると高級なダブルのスーツに身を固めた大家が断言する。

第二十三章 合体

「こいつは佐々木じゃ。何を言っとる」

「いえ、僕は田中です」

「じゃあ、山本さんは？」

立派な服の大家が振り返ると派手な赤いワンピースの女を指差す。

「少し顔が地味になったようじゃが、リングラングに間違いない！」

山本が自分の姿を確認してから、立派な服の大家を見つめる。

「私は山本。でも体型が違う。イヤだわ。こんな身体」

そして立派な服の大家に視線を向けて言い放つ。

「もう『パパ』なんていう言葉は出しません」

「もういい。あれは非常に恥ずかしかった」

「意外だ。恥ずかしいという言葉を知っとるのか」

「なに！」

ふたりの大家が興奮する。田中が止めに入る。

「おふたりはなぜ合体しないのでしょうか」

「わからん」

声を揃えた返事をする。

「ひとつになってもいいのかも知れんが、そうはいかない理由があるんだろうか」

田中が山本に目配せする。

「さあ」

口調が今までの山本と違って色っぽいと感じたのは質素な服の大家と田中だった。

「わしはわしだ」

「わしはわしじゃ」

「まったく同じでもないんですね」

「なにがだ」

「何がじゃ」

「『だ』と『じゃ』。語尾が違います」

「ところでここはどこじゃ」

「田中さんの部屋ですわ」

「えーっ。今の今までアメリカにおったのに」

「このテレビです。原因は」

「そうか。マンションに戻るぞ。わしについてこい」

立派な服の大家が山本と田中に命令するとドアに向かう。質素な服の大家もドアに向かおうとしたとき、例のテレビの画面が明るくなる。田中も山本も画面に注目する。

「大西洋の海水がメキシコ湾に吸い込まれています。すごい勢いです」

上空からの映像が現れる。鳴門の渦潮なんてものじゃない。大型の台風の中心部が風でなく海水で表現されたCGのような画像がテレビの外にはみ出しそうな勢いで渦巻いている。そしてニュースが流れる。

「原因は不明です。先ほど入ってきたアメリカ国防省の発表によると、メキシコ湾上空で潜水艦と遭遇した空軍機がミサイルを発射したが、その潜水艦はミサイルが命中する直前に消えた……」

「空中の潜水艦にミサイル攻撃！ 馬鹿も休み休みに……」

画面が変わる。恐らく戦闘機が撮影した映像なのだろう。まさしく潜水艦が空に浮かんでいる。ただしその潜水艦は骨董品のような旧式だ。戦闘機のパイロットは潜水艦と認識してミサイルを発射したのではなく「UFO」と叫んで発射ボタンを押したというニュースが続く。

「昔の潜水艦は今のずんぐりとしたメタボ型の船体ではなく、シップ型と言って普通の艦船と同じ船体だった。潜るのに艦橋が邪魔だが潜望鏡、通信アンテナ、空気の入れ替えのためのシユノーケルが不可欠だ」

質素な服の大家が息つくと立派な服の大家が引き継ぐ。

「それに浮上すれば周辺の状況を観察しなければならん。少しでも高いところが必要になる。簡素な艦橋が設けられたのじゃ。その艦橋のことを潜水艦では『セイル』と呼ぶんじゃ」

息の合ったふたりの大家の解説に田中と山本が感心しながら驚く。

「時代が進んだとしても潜水艦が空を飛ぶことは不可能ですよね」

「当たり前じゃ」

「だけど空に浮いていたわ」

「わからん」

「宇宙潜水艦ですか」

「あほ！ それは漫画の世界じゃ」

「でも、確かに潜水艦は空に舞い上がってミサイル攻撃を受けたぞ」

「それよりも、メキシコ湾の底に向かって大量の海水が流れ込んでいると言っておった」

「待っていました言わんばかりに静止していた画面が変わって新しい映像が現れる。」

「メキシコ湾の底に穴が開いて、海水が流れ込んでいます。原因は不明ですが、先ほどの潜水

艦はこのメキシコ湾から大空に舞い上がったようです」

「流れ込むと言ったって、メキシコ湾の下が空洞でもない限り、海水が流れ込むなんて考えられない」

田中の疑問に山本が興奮した声を上げる。

「いくつもの空洞があるわ。いつかスミスさんを取材したときにフロリダ、いえ、メキシコ湾付近には地底湖が一杯あると聞いたわ。そこは別世界で不思議な生物が住んでいるとも言っていたわ。『不思議の国のアリス』の世界は地底の世界のことかもしれないとロマンティックな

物語を聞かされた。スミスさんの話し方がうまいのか、私はすっかりその世界にのめり込んだのを今でもはっきり覚えてるわ」

「この部屋は狭すぎる」

立派な大家が山本の感傷的な話に楔くわくを打つ。

「だから、わしの高層マンションの部屋にこのテレビを引っ越しさせた。佐々木も引っ越しさせてふたりでこのテレビを見て、来るべき変化に対処したのじゃ」

「それでレアマタルを手に入れたということですか」

「リングラング、お前が一番よく知っていることじゃ」

「いいえ。私は山本。当然記憶にないわ」

「そんな馬鹿な！ 佐々木は知っているよな」

「僕も知りません。僕は田中です」

山本も田中も外見は立派な服の大家の知っているリングラングと佐々木に似ているのに、記憶は山本と田中のものであった。質素な服の大家がふたりに尋ねる。ふたりは立派な服の大家に対する態度とは遙かに違った反応を示す。

田中が迷いながら口を開く。

「ひよつとして、どこかで世界がふたつに分かれてそのときある男が僕と佐々木に分離して、ある女が山本さんとリングラングに分離した。大家さんもふたりの大家さんに分離した」

この発言に山本はキョトンとし、ふたりの大家は田中が狂ったのじゃないかと思う。

「それじゃ、リングラングと佐々木は今どこにいるの」

「ここにいるじゃないか」

田中が山本に詰めよる。ふたりの大家は声も出さずに田中と山本を見つめる。

「この身体の中に？」

「そうだ」

「そんなのイヤだわ。絶対いやよ」

「でも、そうじゃないとしたら、あのふたりは？」

「リングラングが私の身体の中でさまよっているなんて、絶対に許せない！」

*

グレーノイズの画面になって久しい田中の部屋で沈黙がしばらく続いたあと質素な服の大家が切りだす。

「色々な出来事を解決するためスミスに会いに行くことになったが、その前にわしに、つまりレアメタルで大儲けしたわしに遭遇した。更にその前には日本のどうしようもない問題点に憂いながら何とかしなければと考えた。今までの記憶を遡ればこういうことだった」

田中も山本も気だるそうに頷く。

「なあ、もうひとりの大家さん」

第二十三章 合体

「なんじゃ」

立派な服の大家が身構える。

「むしろも一体化した方がいいのでは？」

「一体化すればどうなるのじゃ」

「一方が消滅するということだ」

「死ぬということか」

「死ではない。過去の記憶が消えて、その過去の記憶に頼らない新しい世界が目の前に広がる。ただそれだけだ」

そのセリフを吐いた質素な大家以上に驚いたのは田中と山本だった。そして拒絶反応を示したのは立派な服の大家だった。

「わしはいやじゃ。お前が消えろ」

「消えてもいいが、勝手に消えない」

「どうということじゃ」

「いつどこで分離したのか記憶はあるか」

「ない」

「わしもない。でも、別々な存在ではない。それが無理矢理別々になっている」

「無理矢理ということは誰かが強制的に分けたということか」

「待ってください」

山本が大きな胸を揺さぶりながら割って入る。

「そのためにアメリカで出会ったんじゃないのかしら」

「そんな意識はなかったが……」

質素な服の大家が一旦否定するが、それを取り消すように頭を横に振る。

「あっ！ わしは知らんうちに……そうだ！ 気が付いたらマンションからアメリカに移って来た」

立派な服の大家が天を仰ぐ。しかし、質素な服の大家が一步踏みだす。

「取りあえず、たもとを分けたあとのわしらの歩みを整理してみよう。合体はそれからでも遅くはない」

「お前、アホか。合体できるかどうか、わからんじゃないか」

「そうも言えん。今、合体するかも知れんぞ」

質素な服の大家が意地悪そうな笑いを浮かべると立派な服の大家が身を引くが、何とか質素な服の大家の視線を受けとめる。少し雰囲気は緩んだところで山本が提案する。

「テレビの電源を入れ直してみるわ」

山本がリモコンのボタンを押す。グレーノイズが消えて鮮明な画像が現れると泣きじゃくる赤ん坊が現れる。画面下には「大家の超若いときの記録」という解説が表示されている。

「なんじゃ？ これは」

立派な服の大家の疑問に追従して質素な服の大家が山本に詰めよる。

「生まれたときの！ 放送局にそんな記録まであるのか」

「いえ、その、あの」

珍しく山本が狼狽える。するとすぐに画面が変わる。

画面には元警部の刑部おさかべが未成年者の殺人事件に関する資料を提示しながら解説する姿が映しだされる。

「覚えていますか。未成年者殺人事件の番組を」

「覚えておる。元警部が色んな資料を使って未成年者の殺人事件の現状とその背景や歴史的な変化を詳細に検証した興味深い番組だった」

質素な服の大家が目を閉じてその番組を思い出す。

「あほか。あんなクダらん番組に感動するとは。わしはあんな番組など見ずに数ヶ月も家賃を滞納している不屈きなヤツの家に向かった」

田中の口が意思とは関係なしに開く。

「僕もですか」

「えっ」

「僕も滞納者でした」

田中は自分の言葉の違和感に思わず唇を咬んでしまう。何を誤解したのか立派な服の大家在田中に詫びる。

「いや、佐々木、いや、田中さんは別扱いじゃ。このテレビを無料で見せて貰ったから、家賃と視聴料を相殺したのじゃ」

田中が唇から血を滴らす。

「ちよつと話が逸れたみたい。僕も佐々木と同じように家賃の集金をしたのでしょうか」

「確か、一緒に集金に行ったはずじゃが……」

立派な服の大家は田中の口元を見て言葉を止める。そして小膝をパンと叩く。

「思い出したぞ。なんだかんだと理屈を並べて言い訳する店子に罵声を浴びせたとき、佐々木が、そうだ！ 佐々木だ。佐々木が割って入った」

急に田中に変化が現れる。

「僕も思い出しました」

この言葉に一番驚いたのは質素な服の大家や山本ではなく、田中自身だった。なぜ急に思い出したのか理解できなかった。しかし、別の記憶が田中の強い疑義意識を破壊していく。そしてそれは完全に破壊された。

「ちよつと待ってください」

山本がハンカチを持って田中に近づく。田中が顔を向けると山本の手が伸びる。

「動かないで」

山本が血に染まった田中の口元をハンカチで撫ぜる。田中は赤く染まったハンカチに視線を向けるが、すぐ立派な服の大家に戻す。

「あのテレビを大家さんにお貸ししますから、今しばらく家賃の支払いの猶予をやってくださいって頼みましたね」

「そうじゃ」

「ちよっと！ 待って！ おかしいわ！」

今度の山本の声は叫び声に近かった。

「大家さんと店子に割って入ったのは田中さん？ 佐々木？ どちらなの？」

「僕だ」「佐々木だ」

田中と立派な服の大家が同時に答える。

「うーん」

山本が唸ると一旦うつむいてから顔をあげて立派な服の大家に尖った視線を向ける。

「体つきはどうでした？ 大柄？ それとも……」

「大柄じゃ。大男じゃ」

「じゃあ、田中さんじゃないわ」

「僕だ。僕がその店子の家賃をもう少し待ってくれるように大家さんをお願いしたんだ」

質素な服の大家が口を挟む。

「わしは田中さんに集金の手伝いはおろか、田中さんからそんな頼みを聞いたことはない」
そのとき立派な服の大家から質素な服の大家に視線を移した田中が膝から崩れる。山本が田中に近づくとき心配そうに尋ねる。

「大丈夫？ ちょっと教えて欲しいことがあるの」

田中は黙って頷く。

「家賃を滞納していた店子ってどんな人？」

「若い女でした。そう、国籍不明の！」

田中が目を大きく見開くと瞬きもせずに山本をじっと見つめる。

「あなたです。リングラング。あなたです」

「私は山本。リングラングじゃないわ！」

今度は山本が自制心を失って顔と大きな胸を激しく横に振る。山本は自分の心の中にリングラングの血が流れているような戦慄を覚える。

「やめて！ やめてえー！」

叫び声のあと大きな音を残して山本？ リングラング？ が倒れる。

*

「いやだわ。私の身体にあんな女の血が、いえ、そんな生やさしいものじゃない。私の身体」

半分があの子の細胞だなんて耐えられない」

「大家さんの細胞でなくてよかったじゃないか。同じ女性で」

田中は最大の慰めの言葉を贈ったと思っただが、山本はおろかふたりの大家からも非難される。「女が女をはむ」と女性の山本の感覚を独身の田中に理解できるはずもない。それに対してふたりの大家が田中を非難したのは単なるヒガミに過ぎなかった。

「山本さん、今さら立派な大家の立志映像なんか見ても先のことが変わる訳でもあるまい。これから役に立つような映像はないのか」

質素な服の大家が山本にリクエストする。

「同感です。でも、ほとほと疲れました。どこかの国の政治家や官僚のように過去の責任なんか取りようもないと開き直って前向きに生きましょう」

「それは少し違うな。その国の政治家や官僚は過去だけではなく将来に対しても当然責任を持つて対処しようとはしない」

「折角ポジティブに前進しようとしていたのに」

山本が口をとんがらかして質素な服の大家に不満をぶつける。

「決してそう言う意味で言ったんじゃない。ゴメン。許してくれ」

「分かりました。過去？ 未来？ どちらでもいいわ。現実を真剣に考えましょう」

「同感だ」

第二十三章 合体

「そのとおりだ」
「なるほど」